

# 『言語転換の文化学』

LIBRARY ICHIKO 149 WINTER 2021 1月31日 発売予定

明治期の言文一致を見直す作業はまだ終わっていない。そこでなされた言語転換は、表象では文語から口語への大きな転換であったが、本質的に日本語の述語制様式があったがゆえに、西欧的移植が可能であったことで、本質は変わっていないのだ。だが、ねじ曲げられた文法は、根元からの組み立て直しを要されるし、コブラ問題の哲学的な了解さえまだなされないままである。

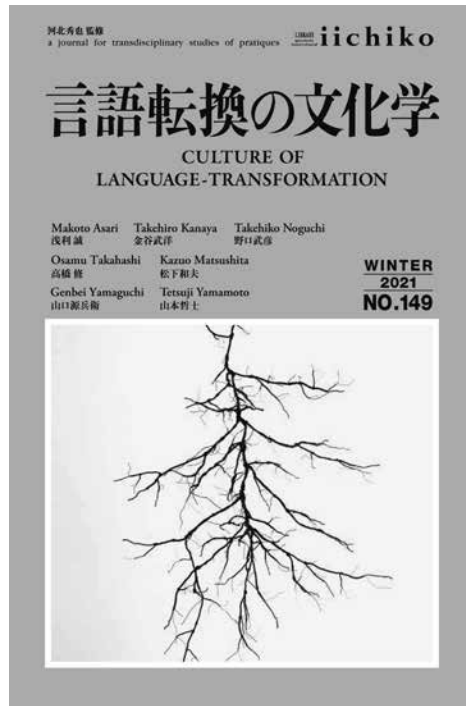
言語転換とは、何を意味することであるのか、それ自体を問う次元へと考察は深まってきている。この問題は、日本語に限らない世界的な問題であって、バナキユラーな言葉がナショナル・ランゲージへと構成された世界的な文化変容の問題に関わる。金谷武洋氏による日本語教科書の英訳を世界へ向けて連載発信する。また、近代二元論が問われてもう数十年が経っているが、代わるものは二元論ではない、哲学・言語地盤そのものの普遍的な見直しになる。鋭利な西欧言語理論もたどりつきえなかつた地平に日本語が有している(述語制言語)の問題があるのだ。それは、言語だけにとどまらないう、科学技術、資本経済、環境設計、統治など、学術と実生活世界のすべての領域に関わっていく。ただ、日本の歴史資本にその遺産がはつきり可能条件としてあることだけは確かである。それを、一つ一つさぐりあてながらすすむとき、近代エビステモロジーの転移が着実になされるということが要されるため、探究は非常に困難な次元へととじているが、わたしたちが答えを作り出していくほかない。

コロナ禍を契機に、一挙に変換があちこちでなされていくであろうが、その基盤は「述語制」の界隈から開かれる。医療行為がそれ自体と医療化との混同が、世間を混乱させているが、だいたいにおいて主語制言語思考と社会規則の誘導によって、そこは乗り越えられない。医療は、愚かな道德化まで生み出してしまふ。医療現場で命がけで闘う人々を尊敬こそすれ排除などしてはならないし、感染者もまた犯罪人ではない、ウイルスと闘ってくれているのだ。「感染」という事象は、未知なるものゆえ、多くの不安を心的にまきおこすが、病に立ち向かうのは個々人の自律性である、規則はなんら解ではない。近代化は、人類の歴史発展において不可避のことであったが、もはやそれでは困難さを克服できない闘へと、人類は達してしまった。酸素濃度の希薄化は、明らかに環境変動からもたらされている。ようやく、脱炭素化が国の方針で出され、またSDGsが世界では提示されている。

知的資本は、知識の網羅ではない、自分の自分に対する自己技術である。知識に対する知的作用である。それは、自らが語り書いている自分の言語への再自覚からはじまる。

▼浅利誠「述語制言語の日本語とコブラ」【連載1】▼金谷武洋「話せる日本語(一)」▼野口武彦「たけくらへ」のナレーション▼高橋修「坪内逍遙「自叙傳」の試み——探偵小説から『細君』へ」▼山口源兵衛インタビュー「美と精神」▼山本哲士「資本経済と言文一致の言語変容における『述語制の論理』の(移動/転移)の問題」▼松下和夫「ネットゼロへの世界の潮流と日本の課題——『緑の復興』(グリーンリカバリー)から脱炭素社会へ」▼気候危機とSDGsに若者がとりくむことへの期待▼カラー特集「奄美の自然と大地が生み出す色」

「LIBRARY ICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇二二年四月末発行予定



A5変形 128頁 定価(本体1,500円+税)

【監修・アートディレクター】  
河北秀也(かわきた ひでや)  
1947年生まれ。日本ペリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】  
山本哲士(やまもと てつじ)  
1948年生まれ。  
政治社会学、ホスピタリティ環境学。  
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

ご注文は「RICK」→ Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局 tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

言語転換の文化学

LIBRARY ICHIKO 149 WINTER 2021 1500円(税別)

ISBN 978-4-910131-08-5 C1010 ¥1500E

書店名

部数